

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 9 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H04776

研究課題名（和文）日本列島における前・中期旧石器文化の存否と後期旧石器文化の成立過程

研究課題名（英文）Existence of the Early and Middle Paleolithic culture and the formation process of the Late Paleolithic culture in the Japanese Archipelago

研究代表者

上峯 篤史（UEMINE, Atsushi）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：70609536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 20,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最大の目的は、日本列島に人類が暮らし始めたのはいつかを知ることである。特に、新人（ホモ・サピエンス）が日本列島に渡来した約4万年より前に、人類が日本列島に到達していたのかどうかを明確にすることをめざし、西日本で有力地の発掘調査や既知の出土品の再検討を実施した。それによって、この問題を明らかにするための研究方法を確立できたほか、先行文化の痕跡と考えられる遺跡証拠を獲得した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「日本列島人の由来」は日本国民のアイデンティティに直結する問題として、社会的関心を集めている。本研究は、遺跡・遺物という具体的証拠をもって、人類集団の進化・拡散史のなかに日本列島人の起源を位置づける。本研究の達成と情報発信は、世界史のなかの日本史、世界のなかの日本列島人を見つめ直す機会と材料を、社会に提供できるはずである。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of this research is to know when humans began to live in the Japanese archipelago. In particular, to clarify whether archaic human beings reached the Japanese archipelago before Homo sapiens arrival at about 40,000 years ago, excavation of site and observation of artifacts were conducted in western Japan. As a result, they were able to establish a research method to clarify the issues, and they obtained archaeological evidence that is considered a trace of human culture before 40,000 years ago.

研究分野：考古学

キーワード：旧石器時代 旧人 新人 文化

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本列島の後期旧石器時代は、遺跡数の突発的増加からはじまる。後期初頭(約 3.8 ~ 3.5 万年前)の遺跡数は約 120 例に達し、より古いと主張される遺跡(約 20 例)に比べて圧倒的に多い(日本旧石器学会 2010)。この現象は、アフリカを出発した現生人類(新人)集団の、日本列島への入植と考えられている(佐藤 2013)。ところが後期初頭の石器群には、中国東部や朝鮮半島の同時期遺跡と共通する要素(鋸歯状石器など)のほかに、周辺大陸に系譜が求められない要素(台形様石器など)が見いだせる。考古学的には、入植してきた新人と先住人類(原人・旧人)が、日本列島で文化を同化させた可能性をうかがわせる(松藤 2014)。

近年、日本列島にも新人入植以前に人類が居住していた証拠が明らかになりつつある(Ikawa ed. 2016)。ところが、約 20 例が知られる「候補地」の評価は一定しない。その原因は、[条件 1] 明らかな人工品を、[条件 2] 年代がわかる地層から掘り出すという条件(杉原 1967)を満たせないためだ。各自の観察眼に依存した従来型の研究方法(竹岡 2005、柳田 2016)では、説得力が乏しい。なぜなら中国大陸や朝鮮半島の例が示すように、原人や旧人の文化は、生業戦略や活動領域、石器の材料選択や製作技術が新人とは異なる(佐藤 2006)。原人・旧人遺跡の実態に合わせた新たな研究方法の開発と、それに則った再現性のある研究が求められていた(松藤編 2016)

2. 研究の目的

研究代表者は堆積学・地形学・岩石学などの研究者と連携し、従来の発掘調査法や資料観察法を、当該期の遺跡の実態にあわせて再編・実践することで、以下の成果をあげてきた。

■ 斑晶観察法の開発 新人以前の「石器」は粗雑な岩石を素材とするため、通常の石器観察法では再現性のある所見が得にくい。そこで割れ面上の石英粒の顕微鏡観察から割れ方向を読み解く「斑晶観察法」を開発し、誰でも同じ観察所見が得られる基盤を整えた(上峯 2014)。

■ 自然破砕礫の実態解明 石器と見まごう自然破砕礫(杉原 1953)を意識的に調査し、成因と考古学的特徴を解明した。これは「石器」の人工品判定の際、比較基準となる(上峯ほか 2016)。

■ 堆積学的発掘調査 新人以前の「石器」出土を念頭に置いた遺跡発掘法をデザインし、これに則った発掘 2 件において、主導的な役割を果たした(上峯 2012、松藤・上峯編 2017)。当該研究の論点を意識し、堆積学的な視点(菊池 1986)にたった発掘調査法とデータの解析手順を取りまとめた。

3. 研究の方法

本研究では、以下の研究を実施した。

① 岩石学・破壊力学の方法をふまえた石器研究法の開発：これらの方法を体系化し、日本列島における新人以前の遺跡「候補地」から出土した石器の評価や、後期旧石器時代初頭の石器群の研究を深めることを目指した。

② 堆積学的方法を導入した発掘調査の実践：日本列島における新人以前の遺跡「候補地」において発掘調査を実施し、その評価を定めるための新資料の獲得をはかった。

③ 日本・中国における既知の石器群の年代精査と再検討：当該研究の論点でありながら年代が詳らかでなかったいくつかの遺跡において、現地調査や既存試料の再分析を実施して、年代を定めた。それらの石器群を観察・資料化し、比較による所見を蓄積した。

4. 研究成果

①については、破壊力学とその応用手法である破面解析を石器研究に応用した英書を翻訳し、それに大幅な加筆修正をおこなうことで日本語版として出版した。

②については、島根県松江市鳥ヶ崎遺跡において 4 次わたる発掘調査を実施し、堆積物の層序と年代、周辺の地質環境を明らかにした。第 1~3 次調査では、遺跡の東側を重点的に調べ、後期更新世堆積物の層序を確立した。2 次調査においては、後期旧石器時代を遡る層から、人工品の可能性がある石製資料が複数得られており、現在、その検討中である。4 次調査においては、関連研究(松岡 2019)をふまえて遺跡の西側を調査し、玉髓製石器等を得た。斜面に設定したトレンチからの出土であるため、堆積物の対比が難しく、年代決定には至っていない(付図参照)。

③については、北京大学、中国科学院古脊椎動物与古人類研究所、中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所などで関連資料の調査を実施し、実測図等を作成した。また大分県早水台遺跡の年代と出土資料の再検討結果を英語論文にまとめ、現在投稿中である。

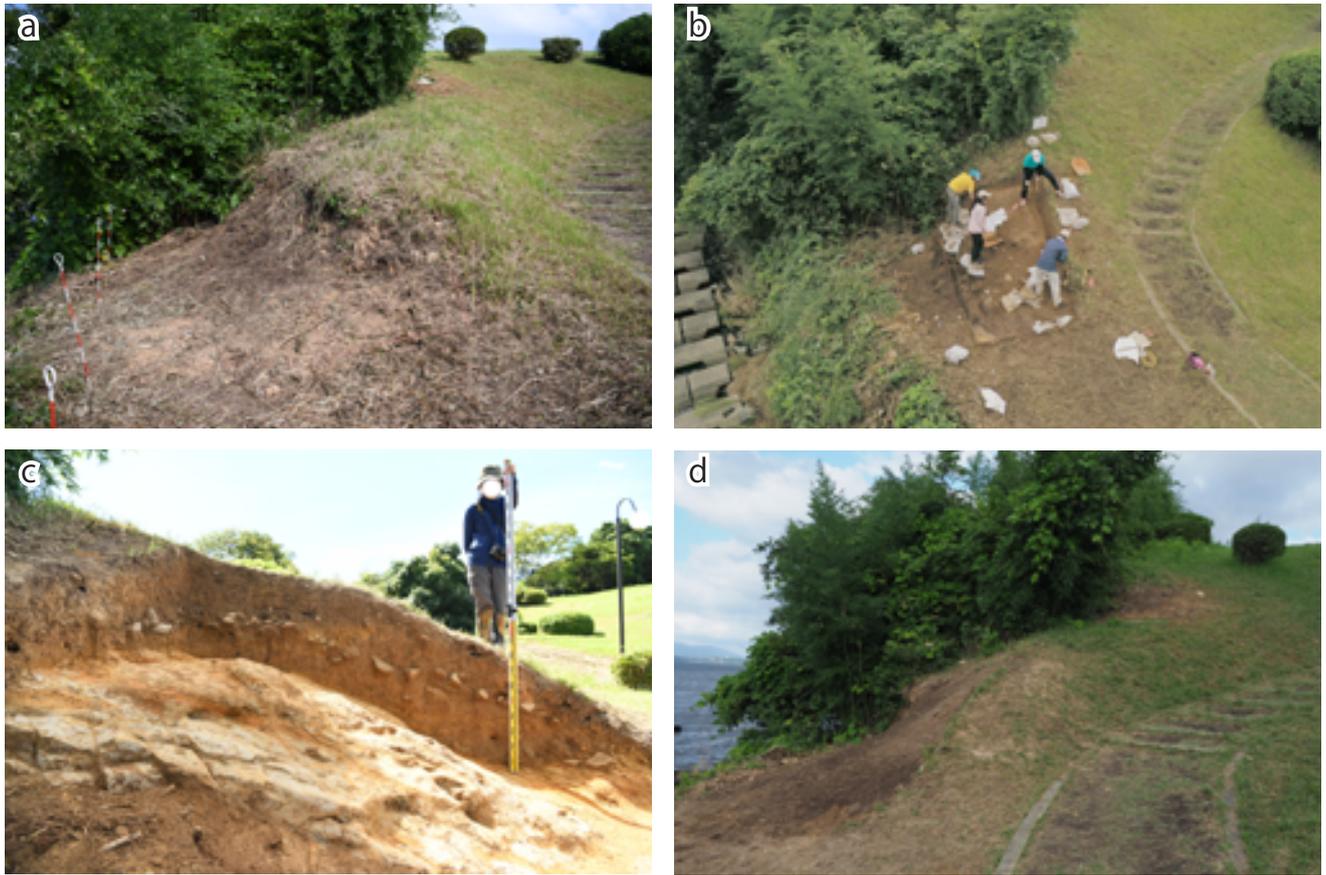


図 1：第 6 トレンチ a 調査前（西から）、b 調査風景（西から）、c 完掘状況（北から）、d 調査終了後（西から）

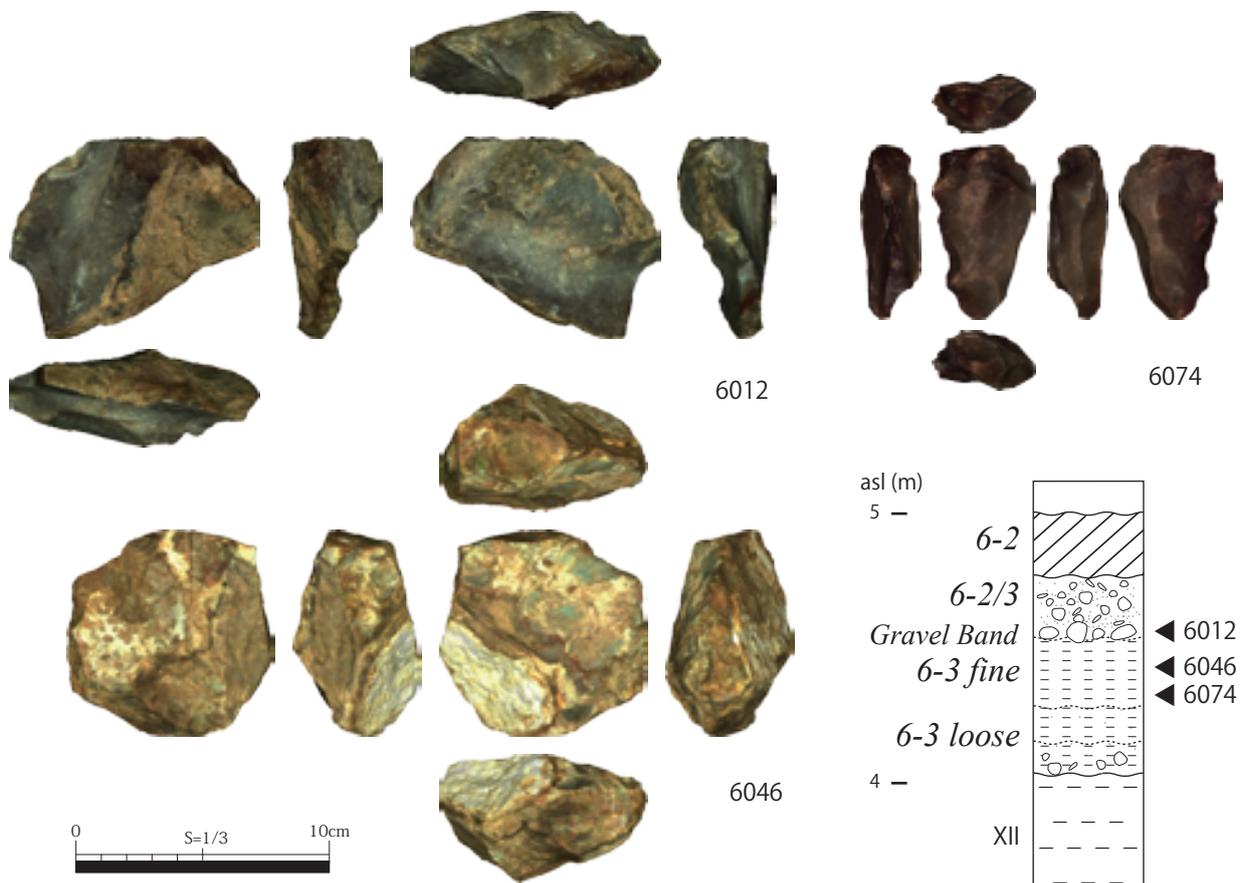


図 2：第 6 トレンチ出土の石器

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 上峯篤史
2. 発表標題 島根県松江市鳥ヶ崎遺跡の後期旧石器
3. 学会等名 パレオアジア文化史学第6回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上峯篤史
2. 発表標題 日本列島の後期旧石器時代を遡る石器群
3. 学会等名 日本旧石器学会第16回研究発表・シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsushi UEMINE
2. 発表標題 Human occupation of Japanese archipelago by 200,000 years ago
3. 学会等名 The 2017 Hakubi Annual report Meeting（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsushi UEMINE
2. 発表標題 Human occupation of Japanese Archipelago during the Middle Pleistocene: Current state and perspectives
3. 学会等名 IPPA HUE 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上峯 篤史
2. 発表標題 ”神様石器”への挑戦－島根県松江市鳥ヶ崎遺跡2017-2018年度発掘調査速報－
3. 学会等名 2018年度京都大学考古学談話会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上峯篤史、朝井琢也、鳥ヶ崎遺跡学術発掘調査団
2. 発表標題 島根県松江市鳥ヶ崎遺跡の発掘調査
3. 学会等名 旧石器文化談話会第112回定例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上峯篤史
2. 発表標題 Did Archaic Hominin Live in Japan? : Excavation of Torigasaki Site, Matsue City, Shimane Prefecture, Japan -
3. 学会等名 京都大学白眉セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Uemine, A.
2. 発表標題 86,000 years ago Human Habitation of Kizaki-Komaruyama Site, the Central Highland of Japan.
3. 学会等名 Ulanmulun site and Palaeolithic Cultures in Asia.（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上峯篤史 訳編著、アレ・ツィルク 原著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 242
3. 書名 石の目を読む：石器研究のための破壊力学とフラクトグラフィ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>http://site-1725902-9497-6180.strikingly.com/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	渡辺 満久 (WATABABE Mitsuhiisa)	東洋大学・社会学部・教授 (32663)	
研究協力者	麻柄 一志 (MAGARA Hitoshi)	魚津歴史民俗博物館・館長	
研究協力者	渡邊 貴亮 (WATANABE Takaaki)	関西大学・博物館・学芸アシスタント	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高木 康裕 (TAKAGI Yasushi ro)	京都大学・文学部・非常勤講師	
研究協力者	朝井 琢也 (ASAI Takuya)	同志社大学・大学院文学研究科・博士後期課程	